

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 29

October 2016

国際アーサー王学会日本支部会報 Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2015年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	2
シンポジウム発表要旨	3
研究発表要旨	5
II. 役員交替について	6
III. 河崎征俊先生を偲んで	6
IV. 受賞のお知らせ	7
V. 電子化について	7
VI. メーリングリストについて	8
VII. 会計年度について	8
VIII. 会計からのお願い	8
IX. 学会サイトについて	8
X. 2016年度大会について	9
XI. 研究発表・シンポジウム企画募集	9
XII. 2017年度国際学会	9
XIII. 会員名簿に関するお願い	9
XIV. 文献情報	9
英文学	9
独文学	11
北欧文学	13
仏文学	13
中世ラテン学・伊文学・西文学・その他	15

I. 2015年度年次大会報告

日本支部の2015年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2015年12月12日 (土) 午後13時30分より

[場所] 立教大学池袋キャンパス (11号館A館
301教室)

[大会費] 1,000円 (学生無料)

[懇親会費] 6,000円 (学生3,000円)

年次大会プログラム

*開会 (13:30)

*開会の辞 支部長 不破有理 (慶應義塾大学)

*開催校ご挨拶 菊池清明 (立教大学)

*第1部: シンポジウム (13:40~)

「Bédier, Vinaver そして Field へ : Malory 学への最新情報」

司会・序論 高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

「Vinaver の秘められた経歴」 神山孝夫 (大阪大学大学院)

「ベディエとヴィナーヴァ: 「狂乱の時代」の中世文学研究」 小沼義雄 (埼玉県立大学非常勤講師)

「Field 版 *Le Morte Darthur* における固有名詞 : Lynet の場合」 小宮真樹子 (近畿大学)

*第2部: 研究発表 (16:00~)

司会: 渡邊徳明 (日本大学)

「『パルチヴァール』の父ガハムレトの物語: 愛 (minne) と誠実 (triuwe) の調和について」

松原文 (東京大学博士課程)

司会: 田中一嘉 (成蹊大学)

「『パルツィヴァール』における異教徒の身体像」
青木三陽 (京都大学非常勤講師)

*情報交換フォーラム (17:20~)

新刊情報のご紹介など

*支部総会 (17:30~)

*閉会の辞 (17:50~) 副支部長 篠田勝英 (白百合女子大学)

*懇親会 (18:00~) 第一食堂 2F 「藤棚」

2015年度年次大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力いただき、無事に開催することができました。心より御礼申し上げます。また当日の運営には立教大学の菊池清明先生のご尽力のもと、同大学時代院生の玉川明日美さんと濱田里美さんにご協力いただきました。篤く御礼申し上げます。懇親会も、盛会のうちに終了しました。ご参加・ご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。（徳永聡子・新居明子）

総会議事録

* 報告事項

(1) 2015年の活動について

年次大会の応募要項について、申し込み締切は、シンポジウムが2015年7月31日、研究発表が8月31日、応募先は直接庶務担当者という報告があった。（庶務：徳永聡子）

(2) BulletinとNewsletterの書誌記載方法について

2016年度の業績募集から本部指定の新方式に沿ったフォーマットを使用するという報告があった。（書誌：高名康文）

(3) 会計年度について（会計：田中一嘉）

2016年度より会計年度は、原則12月1日より翌年11月30日までの一年間とすることが報告された。

(4) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について（Web委員会：細川哲士）

(5) 2016年度年次大会（12月17日）・2017年度年次大会（12月未定）開催校について

(6) 2017年国際ドイツ大会について

開催日：2017年7月23日～29日 @Würzburg（独）

* 審議事項

(1) 2015年度決算報告（2014年12月2日～2015年11月30日）

会計担当幹事の田中一嘉氏より会計収支決算が報告され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費 ^{※1} （134件）	401,000
寄付金（1件）	2,000
入会金	0
小計	403,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	19,000
懇親会費	93,000
書店出展料	10,000
小計	122,000
2014年度からの繰越金	706,026
普通預金口座利子	197
総計	1,231,223

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	198,607
ホームページ関連費用	6,631
事務用品代・雑費	6,264
通信費	49,232
振込手数料	3,192
小計	263,926
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,800
懇親会費用	91,800
事務用品代・雑費	2,093
小計	104,693
2016年度への繰越金 ^{※2}	862,604
総計	1,231,223

※1 ※2) 昨年度まで、会費収入の一部を「前受け金」として翌年度の収入費目に計上しており、今年度の会費収入のうち69,000円分がそれにあたる。現在の繰越金（預金）は単年度収支額に対して十分なこと、および会計処理簡略化のため、今年度より「前受け金」制度を撤廃した。そのため、帳簿上（見た目上）で、会費収入が支出全体に対して大きくなっている。2016年度へ繰り越す額が大きくなっているのも、そのためである。

(2) 2016年度予算案提出（2015年12月1日～2016年11月30日）

続いて2016年度予算案が提出され、会員の承認を受けた。

収入

項目	収入額
年会費（会員数 90 名@3,000 円）	270,000
寄付金	10,000
入会金	9,000
小計	289,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	25,000
懇親会費	120,000
書店出展料	10,000
小計	155,000
2015 年度からの繰越金	862,604
普通預金口座利子	200
総計	1,306,804

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	200,000
ホームページ関連費用	9,000
事務用品代・雑費	25,000
通信費	50,000
振込手数料	5,000
小計	289,000
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	120,000
事務用品代・雑費	25,000
小計	155,000
2017 年度への繰越金	862,604
総計	1,306,604

(3) Web委員会の幹事委嘱について

Web委員の幹事委嘱について提議され、会員の承認を受けた。（会長：不破有理）

(4) 規約改正について

上記に伴い「国際アーサー王学会日本支部規約」の第7条、第12条と「国際アーサー王学会日本支部役員選出規則」の第1条の改正、その他「日本支部規約」第8条、第15条、第14条、「役員選出規則」の第2条の改正が提議され、会員の承認を受けた。

（会長：不破有理）

(5) Web委員会の予算について

Web委員会の正式発足にともない、査読にかかわる通信費を学会負担とすることが了承された。

（会長：不破有理）

(6) 新入会者承認について

以下の2名より入会の希望があり、会員の承認を受けた。

松原文（東京大学大学院）

長谷川千春（大東文化大学）

シンポジウム「Bédier, Vinaver そして Field へ：Malory 学への最新情報」発表要旨

司会・序論 高宮利行

現代の Malory 学は、Winchester MS を底本として 1947 年に Vinaver が編纂した *The Works of Sir Thomas Malory* (Oxford: Clarendon) を中心に展開してきた。しかし、2013 年に Field が Malory の原本を再構成する目的で編纂した *Le Morte Darthur* (Cambridge: Brewer) が出版されるに及んで、新たな局面を迎えた。その一方で出版史という新たな視座から Vinaver 版の出版に至る舞台裏を探る研究が、Edwards, Takamiya, Samantha Rayner などによって発表されるようになった。このシンポジウムでは、偉大な Malory 学者 Vinaver の出自、Vinaver が強い影響を受けたとされる Bedier との関係、さらに Vinaver と比較した際の Field 版の本文の妥当性を扱う 3 本の問題提起を通して、最新情報を提供するとともに、Malory 学の意義を再検討した。

① 「Vinaverの秘められた経歴」

神山孝夫

Vinaver（波Winawer, 露Винавер）家誕生の経緯、Maximの数奇な生涯を紹介し、Eugèneの大学就学

をめぐる事情を探った。

Winawer (ヴィナーヴェル) 家は、19 世紀初頭、ポーランド分割後のプロイセン領ワルシャワに確認される富商に端を発する。その出自は、ユダヤ人が定住したルブリン近郊の Wieniawa (ヴィエニャーヴァ) にあったと考えられ、この地名にドイツ語接辞 -er を加え、ドイツ語発音習慣に呼応した改変を経てその姓を得たと想像される。

その数代後、ロシア領となったワルシャワに誕生した Maxim はペテルブルグ (1914 年よりペトログラード) に移って弁護士業の傍ら公民権運動で名を馳せ、次いで帝政末期の混乱の中、立憲民主党を創設して国政に身を投じる。17 年の帝政崩壊後は暫定政府の一員となるも、十月革命によりレーニンが政権を奪取。クリミアに逃れた Maxim は同地に結集した同志とともに地方政府を樹立して 18 年 11 月外務大臣に就任、英仏軍駐留による領土保全を達成した。だが、大戦終結に伴う両軍撤退を受け、19 年 4 月の赤軍侵攻に至って一家はついにロシアを捨てる。

他方、17 年初夏に中等教育を首席で修了した後、翌年末に父の秘書となるまでの Eugène の経歴は杳としている。数々の状況証拠や証言を基にすれば、その間、彼はペトログラード大学法学部に学んだはずであり、父も旧知の同学教授 Baudouin de Courtenay (言語学・文献学) の知己を得た、ないし多少とも文献学的訓練を受けたと疑われる。だとすれば渡仏の際 Baudouin de Courtenay からパリの Meillet を経て Bédier に紹介が及んだかもしれない。各種国際会議、暫定政府、クリミアで培った父の人脈・影響力と、父譲りの異能がこれに加わり、通常ならざる道を経ながらも英仏での学が成されたと推察する。

②「ベディエとヴィナーヴァ：「狂乱の時代」の中世文学研究」

小沼義雄

ウジェーヌ・ヴィナーヴァはその著作の中で、しばしばジョゼフ・ベディエの弟子であることを強調している。ロシアから亡命したヴィナーヴァがベディエと初めて出会ったのは 1920 年のことで

あり、一般的にベディエの研究指導を受けながら 1925 年にソルボンヌ大学で『散文トリスタン』とマロリーの『アーサーの死』に関する比較研究で博士号を取得したと信じられている。ヴィナーヴァはベディエへ惜しめない感謝と尊敬の念を表明しているが、その一方でベディエ側の資料からヴィナーヴァとの師弟関係を裏付ける証言を見出すことは容易ではない事情がある。というのもベディエが革新的な研究者として活躍していたのは 1893 年の『ファブリオー研究』から 1913 年の『影の短詩』の校訂版 (第二版) までの約 20 年間に限られており、この 20 年間に数々の画期的な著作が集中的に執筆されている。1920 年にベディエはアカデミー・フランセーズ会員に選出され、社会的榮譽という点では頂点に達していたものの、それ以降の彼の限られた著作物にヴィナーヴァへの言及を見出すことは極めて難しいように思えるからである。また、ベディエはコレージュ・ド・フランスという学位授与・資格試験とは一切関係のない教育機関で教鞭を執っていた立場上、ソルボンヌ大学に提出する博士論文の指導を担当することは現実的には考えにくく、モーリス・デルブイユの証言によると、実質的な指導教官はアルフレッド・ジャンロワとエミール・ルグイであり、助言役のベディエから本質的な研究上の指針を与えられたとされている。今回の調査で参照した未刊行資料もまたデルブイユの証言を裏付ける内容であり、少なくともフランス側の資料に基づく限り、一般的に英文学者の間で信じられているヴィナーヴァ像とはかなり異なる実像が浮かび上がってくる。

ヴィナーヴァはマンチェスター大学の仏文科で中世から近代に至るフランス文学を総合的に教える立場にあり、マロリー研究以降、彼の知的関心はフロベールやラシーヌへと傾いてゆく。高等師範学校時代のベディエもまた近代文学を教えており、彼が研究者として広範な支持を勝ち得た理由は、フランスの文学的伝統に中世作品を合理的に位置づけることに成功した点にある。本発表はベディエとヴィナーヴァの足跡を辿ることから出発

し、両者が邂逅した 1920 年代のパリにおいて、ヴィナーヴァがベディエから受け継いだ文学的ヴィジョンを多角的に明らかにすることを目的とする。

③ 「Field 版 *Le Morte Darthur* における固有名詞：Lynet の場合」 小宮真樹子

1990 年に Vinaver 編纂の Malory 第三版が出版された際、Field は改訂を行った。しかし彼が 2013 年に出版したエディションは、Vinaver 版とは大きく異なっている。本発表では特に Gareth と旅をする乙女 Lynet の名前に着目し、Field 版の独自性について考察した。

Vinaver は Winchester 写本をほぼ忠実に反映し、リネット・リオネス姉妹の名を複数の綴りで表したが、Field 版は Caxton に倣ってリネットには Lynet という同一のスペルを用いている。この表記は姉妹が別人であることを強調すると同時に、Chrétien の Yvain に登場する乙女「ルネット」を連想させる。Malory が Gareth の物語を執筆するうえで用いた種本は未だ発見されていないが、Field は乙女の名前を Chrétien と関連づける形に統一したのである。

さらに Vinaver が姉妹二人に写本と同じスペルを用いたのに対し、Field はリネットに関しては Caxton 版を、リオネスに関しては写本を参照している。リオネスという固有名詞は時おり人名と地名の区別が曖昧になるが、この類似は失われた種本では明白だった、姫君とロージアン王国の繋がりに由来すると思われる。Field 版、Vinaver 版、Winchester 写本では婦人の名前には主に Lyonesse が、トリストラムの故国には Lyones という綴りが用いられるのに対し、Caxton は両者に Lyones というスペルを多用している。婦人と国名を極端に混同するような改訂を好まなかったため、Field は Winchester 写本に倣ったのであろう。

リネットの綴りをフランスの作品を連想させる形に統一する一方で、リオネスには人名と地名をゆるやかに区分する表記を採用する。こうした固有名詞の扱いに、物語に対する Field の解釈が集約されていると言えるだろう。

研究発表要旨

① 「『パルチヴァール』の父ガハムレットの物語：愛 (minne) と誠実 (triuwe) の調和について」

松原文

13 世紀初頭、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハはクレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァール』を原典として『パルチヴァール』を書いた。未完に終わった原典に対してヴォルフラムは大幅に加筆したが、本発表は中でも主人公パルチヴァールの父の物語に注目した。『ペルスヴァール』では母の口からたった 70 行ほどで簡単に死の経緯が語られるに過ぎない主人公の父親だが、ヴォルフラムはガハムレットという名を与え東方世界を冒険させ、3000 行余りの物語へと膨らませている。

まず『ペルスヴァール』のほか、ヴォルフラムが影響を受けた可能性のある作者未詳の *Bliocadran-Prolog* を参照した。そしてヴォルフラムは、騎士の宿命的な死に対する女性の嘆きをより鮮烈に描写した *Bliocadran* の構図を踏襲したことが確認された。また先行作品には全く存在しない要素、すなわちガハムレットが二度結婚し、最初に結婚した黒人の女王を捨てるというエピソードを加えることにより、愛と戦いを追求する騎士道の孕む問題に肉薄していることが分かった。

『パルチヴァール』で語り手は正しい愛 (minne) とは真の誠 (triuwe) だと言い、その二つが調和する主人公の結婚の愛が高く評価されている。それに対し、ガハムレットは戦いへの衝動を結婚生活に優先させており、女性に対する真の誠を全うしたとは言い難い。ただし、作品を後ろから注意深く振り返ってみると、実はガハムレットは息子によって否定される単純な負のモデルではなく、むしろ息子の物語の額縁となり相対化する役割を果たしていることが分かる。というのも聖杯世界を最終的に繁栄させるのは、ガハムレットと黒人の女王との間に生まれた異教徒の王子であり、その一方、パルチヴァールの息子ロヘラングリーンは祖父ガハムレットと同じく妻を捨てている。ヴォルフラムは minne と triuwe の調和を謳いながらもガハムレ

トの愛と冒険を最終的には肯定的に作品世界に取り込み、主人公を全面的には賛美せず、価値観を相対化しているのだ。

②「『パルツィヴァール』における異教徒の身体像」 青木三陽

今回の発表では、ヴォルフラム・フォン・エッセンバッハの『パルツィヴァール』に登場する様々な異教徒像に注目し、その特異な身体像が物語世界構築のためにどのような役割を担っているかについて考察した。

『パルツィヴァール』には大きく分けて3つの「東洋」が登場する。現実的实践知に基づいて描写されるイスラム教国、古典古代からの伝承に多くをよるエチオピア、そして司祭ヨーハンの書簡により同時代人の憧れをかき立てつつあった伝説の地インド。はっきりした境界をもって区別化されるこれらの地は、いわばよって立つ次の次元を異にする三世界である。

これらの三世界にはそれぞれの領域を代表するような人物が登場する。その性質を象徴するのが、彼らが有する特異な（西洋人の目には奇異とも映る）身体であった。代表的なものとしては、ベラカーネの「夜のように黒い」肌やクンドリーエの怪物的身体が挙げられよう。そして物語終盤に登場するフェイレフィースは、西洋人の父と東洋人の母を持つがゆえに「白と黒が入り混じった」肌を有しており、その身体にふさわしく両世界を一つに結びつける役割を担うのである。

このように、ヴォルフラムの描く詩的異教徒像にはキリスト教世界にとっての「他者」たる存在に対して抱かれた当時のイメージが複雑に絡み合いながら反映されている。他者であるが故に、彼らは身体・皮膚という表層的部分において西洋との明確な異質性を見せつける。しかし同時に、宮廷社会の関心軸に沿って共存可能な存在に書き換えられ、理性によって相互理解可能な存在へと変貌を遂げている事実も観察できるのである。身体イメージによって強調される他者性は、かつてない広がりを持った異境を物語の舞台とする『パル

ツィヴァール』にとって必要な環境を設定する、そのための手段となっているといえるだろう。

II. 役員交替について

この度、幹事の交替がありました。庶務交替については2016年5月の幹事会で、独文書誌交代については2016年9月の幹事会で正式に認められました。

庶務

旧：徳永聡子（英文学：慶應義塾大学）

新：新居明子（英文学：名古屋外国語大学
英文書誌と兼務）

独文書誌

旧：渡邊徳明（独文学：日本大学）

新：伊藤亮平（独文学：松山大学）

III. 河崎征俊先生を偲んで

河崎先生はいつも物静かな口調と物腰で、やわらかい光に包まれたようなお方だった。数年ごとに著作を世に問うと心に決めてらしたとご遺族がご紹介なさった通り、国際アーサー王学会でも『ガウェインと緑の騎士』について2002年から2011年までに4度海外発表なさったほか、9冊の共著単著を上梓なさった。『チョーサーの詩学—中世ヨーロッパの〈伝統〉とその〈創造〉』（開文社、2008）が研究書としては最後の著作となった。

詩人としての河崎先生は、言葉は「たましい」という原初的な部分から発せられない限り意味を持たない」と断言し、その「たましい」とは「根源的な情念の世界」であると最初の詩集『閉ざされた沈黙』のあとがきに記されていた。私が存じ上げる学者としての河崎先生は先生の一面にすぎなかった。追悼の文をしたためて、初めて人の人生の新たな一面を知るのは痛恨の極みである。もっとお話を伺いたい時にはすでにその術が閉ざされている。2016年5月16日ご逝去、享年71歳。

心より哀悼の意を捧げ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。このたびは、河崎先生とは旧識でいらっしやる中世英文学者池上恵子先生に特別ご寄稿をお願い申し上げます。（不破有理）

「河崎征俊先生 追悼」

河崎征俊先生のご体調が優れないことは、ご退職記念論文集祝賀会が延期になったことで、うすうす気付いてはいましたが、定年退職後よくあるようにお疲れが出たとしか思いませんでした。2015年3月15日の最終講義では、「詩人」チャーサーとその作品に、ほとぼしするような愛情を込めて、柔らかい口調で聴衆を魅了なさいました。私はとかく皮肉や揶揄を読み取ってしまうことを反省しました。引続く祝会では、終始お立ちになったままで大勢の出席者と交わり、ご挨拶では、チャーサー研究への道程と駒澤大学での長い歳月を振り返るスピーチをなさり、お元気でした。

2016年3月『渋田川幻想』を頂き、河崎先生ご自身が「詩人」であることを改めて感じて読みながら、拙い感想をお送りしたところ、4月2日にかなり長文の携帯メールが届きました。これが、先生との交信の最後となりました。一部引用をお許し頂きます。「昨年の7月から平塚の病院に入退院を繰り返し...4月中旬頃にはまた退院できそうです」との文面にほっとする愚かな私でしたが、メールの後半を読んで、現実を察知いたしました。「第2章の「生命」「窓」「眼」「詩って何?」は入院後の8月に書いた作品です。」「心に浮かんだ言葉を知性とか知識だけを頼りに直していきますと、浮かんだ言葉がすべて消え失せてしまいます。でも、自分の感性と称するものに百パーセント頼りすぎると言葉の意味が相手にほとんど伝わらなくなってしまいます。」そして、谷川俊太郎の「河崎さん、詩は句読点だけで詩になることだってあるんだよ」という言葉を引いて、次のように結ばれています。「頭だけを使うだけでは詩は書けませんし、理解も得られません。本詩集の最後に載せた詩をご覧頂ければ嬉しいです。」

その「詩って何?」のほんの一部です。

「句読点がなくなると/詩になる」「詩は生命の母体/動脈と静脈をそなえた/生命の母体/ほんのかけすかな/いや 突発的な/からだの変調で/楽の調べが狂ってしまい/生命体がおわりを告げる/こともあるんだから」

この病床での先生の声聞き取らずに感想を送ったことを恥じました。「詩のことばは一瞬に吹き出す/マグマのようなもの/熱い生命の母体から吹き出す/マグマのようなもの」との叫びを残して先生はこの世の生を見事に終えられました。

先生にはもっともっと長生きして、あの静かなお声で、私たち、とくに若い方々に人がことばを紡ぐことの意味を、生きることを、語り続けて頂きたかったのです。しかし、何冊もの優れた研究書、詩学・詩論に関するご著書、そして詩集によって、研究者であり詩人でもあった先生の文学と人生への情熱は伝わり続けます。御霊のご平安を祈ります。池上恵子（成城大学短期大学部名誉教授；前大東文化大学教授）

IV. 受賞のお知らせ

- ・松村剛先生は2015年に『中世フランス語辞典』(*Dictionnaire du français médiéval, Les Belles Lettres*, 2015)をご出版、その功績により本年2016年度のアカデミー・フランセーズ・フランス語圏大賞を受賞なさいました。原野昇先生による書評は次号の西洋中世学会誌『西洋中世研究』に掲載予定。
- ・元会員沓掛良彦先生は2015年ご出版の『黄金の豎琴 沓掛良彦訳詩選』(大和プレス刊、2015年6月)により、第67回読売文学賞「研究・翻訳賞」を受賞なさいました。同文学賞は、本会の現副会長篠田勝英先生がギヨーム・ド・ロリス/ジャン・ド・マン『薔薇物語』(*Le Roman de la Rose*, 平凡社刊、1996年6月)の翻訳によって第48回「研究・翻訳賞」を受賞、元会長の天沢退二郎先生が『幽明偶輪歌』(思潮社刊、2001年10月)で第53回「詩歌俳句賞」を受賞なさっています。

あわせてご報告と共に、お慶びお祝い申し上げます。(不破有理)

V. 電子化について

日本支部では、会員の皆様への連絡やニューズレターなどの発行について、2018年2月以降をめどに、メーリングリスト等の電子媒体を活用する方向で準備を進めております。昨年度よりお伺いし

ております電子化についてまだご回答いただいていない方は、同封葉書または下記サイトからご回答くださいますようお願い申し上げます。また、電子化にご賛同いただける方でまだメーリングリストにご登録いただいていない方、またご登録のメールアドレス変更をご希望の方も、同様をお願い申し上げます。新規ご登録やご変更につきましては、後日学会メーリングリストにてもご案内する予定です。

<https://goo.gl/forms/Oxrei710zrx4EvUo1>

なお、郵送での連絡・発送をご希望される会員には従来通り、郵送でお送り申し上げます。

本件について、何とぞご理解を賜りますようお願い申し上げます。

VI. メーリングリストについて

これまで支部会員間の情報交換のための場として、また事務局からのお知らせをお伝えする際にも、学会メーリングリストを活用してまいりました。今後はセキュリティ面を考慮し、会員相互の交流のためのメーリングリストとは別に、学会事務連絡用に新たにメールマガジンを導入する方向で現在検討中です。

詳細は後日お知らせいたします。

VII. 会計年度について

2015年度第1回幹事会において、会計担当より会計度を総会開催時期に合わせ、12月1日から翌年の11月30日に変更することが提案され、2015年度総会において承認されました。今年度は2016年11月30日までの振込分を2016年度収入として処理し、来年度以降も会計年度は12月1日～11月30日となります。

VIII. 会計からのお願い

2017年度分（ならびにそれ以前の未納分）会費の納入をお願い申し上げます。会費は同封の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、右記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）
店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）
預金種目：当座
口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともにお振込みいただくか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。（会計：田中一嘉）

【お知らせ】会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご留意ください。（この手続きに関しましては、2016年度第1回幹事会にて確定されました。）

IX. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

また、アーサー王に興味はあってもよく知らない、という人たちのために、登場人物や作品を詳しく説明する「アーサー王伝説解説」コーナーが、いよいよ今冬より公開予定です。扱う項目は継続的に増やしていきたいと思っておりますので、特に若手の会員の方は奮ってご投稿ください。

学会公式ツイッター（@inter_arthur_jp）でも随時情報の発信を行っております。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

https://twitter.com/inter_arth_ur_jp

(Web委員長：細川哲士)

X. 2016年度大会について

2016年度大会は次の要領で開催されます。

(詳細は同封の大会資料をご覧ください。)

日時：2016年12月17日（土）13:00 開会

会場：成城大学3号館311教室

懇親会会場：「学生ラウンジ」7号館B1

XI. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

XII. 2017年度国際大会

2017年度の国際大会はドイツのWürzburgで開催され、次のテーマが扱われる予定です。

- Voices, Sounds and Rhetoric of Performance
- Post Medieval Arthur Printed and Other Media
- Translation, Adaptation and Movement of Texts
- States of Arthurian Editions : Problems and Perspectives
- Sacred and Secular in Arthurian Romance
- Critical Moments and Arthurian Literature : Past, Present and Future

XIII. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関しては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）

を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

また、同封葉書や先述の「V. 電子化について」でご案内しておりますように、今回より下記サイトからも名簿登録情報のご変更が可能となっております。ぜひご活用ください。

<https://goo.gl/forms/Oxrei710zrx4EvUo1>

XIV. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

英文学（書誌担当：新居明子）

<研究（単行本）>

田島松二『中英語の統語法と文体』、南雲堂、2016年。

<研究（雑誌・紀要論文等）>

Kayoko ADACHI（足達賀代子）“The Slow Progress of Arthur's Quest: The Apocalyptic Anxiety in *The Faerie Queene*,” *Studies in English. The Regional Branches Combined Issue*, (The English Literary Society of Japan), 8, 2016, pp.127-134.

Hiroki OKAMOTO（岡本広毅）“Gawain's Treachery on the Bed: Trojan Ancestry and Territory in *Sir Gawain and the Green Knight*,” *Studies in English literature*, (The English Literary Society of Japan), 56, 2016, pp.19-37.

小宮真樹子「クエスティング・ビーストの探求：トマス・マロリーの不思議な動物」、『幻想と怪奇の英文学2 増殖進化編』（東雅夫・下楠昌哉編）、春風社、2016年、pp.166-181.

小宮真樹子「乳兄弟と兄弟愛：トマス・マロリーの『アーサー王の死』におけるケイの描写」、『アーサー王物語研究：源流から現代まで』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.83-108.

近藤まりあ「二人の魔術師：マーク・トウェイン『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキ

- 一』におけるアーサー王物語」、『アーサー王物語研究：源流から現代まで』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.263-284.
- 篠原結城「大罪からの脱却への旅：マロリーにおけるガウェインとランスロットの結末」、『Oliva』（関東学院大学人文学会英語文化学会）、第22号、2015年、pp.79-97.
- 小路邦子「スコットランド抵抗の象徴 モードレッド」、『アーサー王物語研究：源流から現代まで』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.109-143.
- Seiji SHINKAWA（新川清治）“The Zero Period of Spelling Standardization: Two Contrasting Manuscripts of *Lazamon's Brut*,” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.29-40.
- Masako TAKAGI（高木眞佐子）“Retrograde Text: Manifestation of Authenticity?” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.59-69.
- 多ヶ谷有子「ドラゴンと宝剣西東：時代の大変革におけるその意味」、『関東学院大学人文学会紀要』（関東学院大学人文学会）、第133号、2015年、pp.37-60.
- 遠山菊夫「コミュニケーション以前：古英語・中英語話者による相互行為(2)『ベオウルフ』および『ガウェイン卿と緑の騎士』における共存の原理(1)」、『杏林大学外国語学部紀要』（杏林大学外国語学部）、第28号、2015年、pp.53-123.
- 長谷川千春「魔術・予言・言葉の力：中世アーサー王文学におけるマーリンの威光」、『語学教育研究論叢』（大東文化大学語学教育研究所）、第33号、2016年、pp. 91-105.
- 不破有理「『よりよいテキスト』探索の旅：サー・トマス・マロリー『アーサーの死』をめぐる数奇な出版事情と編集者たち」、『旅の書物／旅する書物』（松田隆美編）、慶應義塾大学出版会、2015年、pp.39-71.
- 辺見葉子「アーサー王物語とJ.R.R.トールキン：アヴァロンとエレスア」、『アーサー王物語研究：源流から現代まで』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.285-323.
- Simon HOROBIN “Dialects and Standards in Late Middle English,” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.17-28.
- 森野聡子「ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ」、『アーサー王物語研究：源流から現代まで』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.33-80.
- <書評>
- 井野崎千代子「Helmut GNEUSS & Michael LAPIDGE (eds.), *Anglo-Saxon Manuscripts: A Bibliographical Handlist of Manuscripts and Manuscript Fragments Written or Owned in England up to 1100*, Tronto, University of Tronto Press, 2014」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年、pp.175-176.
- 大野英志「Peter G. Beidler, *Chaucer's Canterbury Comedies: Origins and Originality*, Seattle, Washington: Coffeetown Press, 2011」、『Studies in Medieval English Language and Literature』（日本中世英語英文学会）、第30号、2015年、pp.107-119.
- 岡本広毅「書評 菊池清明著『中世英語英文学 I：その言語と文化の特質』」、『英米文学』（立教大学文学部英米文学専修）、第76号、2016年、pp.111-114.
- 小川浩「Allen J. Frantzen, *Anglo-Saxon Keywords*, Chichester: Wiley-Blackwell, 2012」、『Studies in Medieval English Language and Literature』（日本中世英語英文学会）、第30号、2015年、pp.83-93.
- Hiroko OKUDA（奥田宏子）“Fiona Tolhurst, *Geoffrey of Monmouth and the Feminist Origins of the Arthurian Legend*, New York: Palgrave

Macmillan, 2012,” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.95-106.

Mami KANNO (菅野磨美) “Barbara Newman, *Medieval Crossover: Reading the Secular against the Sacred*, Norte Dame: University of Norte Dame Press, 2013,” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.137-149.

小塚良孝「大沢一雄訳『アングロ・サクソン年代記』東京：朝日出版社、2012年」、『*Studies in Medieval English Language and Literature*』、(日本中世英語英文学会)、第30号、2015年、pp.71-82.

Hisashi SUGITO (杉藤久志) “Lynn Arner, *Chaucer, Gower, and the Vernacular Rising: Poetry and the Problem of the Populace after 1381*, University Park, PA: The Pennsylvania State University Press, 2013,” *Studies in Medieval English Language and Literature*, (The Japan Society for Medieval English Studies), 30, 2015, pp.127-136.

多ヶ谷有子「デレク・ブルーア、海老久人・朝倉文市訳『チャーサーの世界：詩人と歩く中世』、『*Studies in Medieval English Language and Literature*』、(日本中世英語英文学会)、第30号、2015年、pp.121-126.

<翻訳>

『中世英雄叙事詩 ベーオウルフ 韻文訳』(柘矢好弘訳)、開拓社、2015.

<その他>

野口洋二『中世ヨーロッパの異教・迷信・魔術』、早稲田大学出版部、2016年.

<講演>

不破有理「マロリー以降：『アーサーの死』の出版史と中世復興と大英帝国」、第35回日本ケルト学会研究大会基調講演(2015年10月18日)、於慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階大会議室.

独文学(書誌担当：渡邊徳明)

<研究(単行本)>

Akihiro HAMANO (浜野明大), *Die frühmittelhochdeutsche Genesis Synoptische Ausgabe nach der Wiener, Millstätter und Vorauer Handschrift*, Hermaea Neue Folge 138, De Gruyter, Berlin / New York 2016. (Germany)

<研究(雑誌・紀要論文等)>

Manshu IDE (井出万秀) “Profilierung der altbekannten Helden in der Hundehageschen Handschrift. Eine spätmittelalterliche Rezeption des *Nibelungenliedes*”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe von „*Doitsu Bungaku*“ 『ドイツ文学』151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.105-123.

石川栄作「『ニーベルングの歌』と『平家物語』の比較研究(VII)：悲劇の作品構造」、『言語文化研究』(徳島大学)、第23号、2015年、pp.63-71.

伊藤亮平「ミネ概念に対するミネゼンガーの懐疑—ハインリヒ・フォン・モールンゲンを中心に—」、『日本独文学会研究叢書』、第109号(『中世ドイツ文学における「愛」の諸相—「ミネ」が文学化された意味を求めて—』)、2015年、pp.17-29.

大島浩英「ゼバスティアン・ブラント『阿呆船』“Von gytheit”(「食欲のこと」)に関する語学的考察」、『大手前大学論集』(大手前大学)、第16号、2015年、pp.21-35.

Yuko KATAYAMA (片山由有子) “Stimme und Schweigen der Margaretha Ebner. Zum Verhältnis von Sprache und Mystik bei einer deutschen Nonne des 14. Jahrhunderts”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe von „*Doitsu Bungaku*“ 『ドイツ文学』151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.92-104.

Yoshiki KODA (香田芳樹) “Synderesis und Scham. Zur Genese des kognitiven und affektiven Gewissens im abendländischen Mittelalter”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe

- von „Doitsu Bungaku“ 『ドイツ文学』 151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.54-74.
- 嶋崎啓 「文学化される前のminneの語義」、『日本独文学会研究叢書』、第109号 (『中世ドイツ文学における「愛」の諸相—「ミンネ」が文学化された意味を求めて—)、2015年、pp.3-16.
- 田中一嘉 「ナイトハルトのミンネザングにおける「宮廷」の役割」、『日本独文学会研究叢書』、第109号 (『中世ドイツ文学における「愛」の諸相—「ミンネ」が文学化された意味を求めて—)、2015年、pp.30-44.
- 寺田龍男 「『ニーベルンゲンの歌』はゲルマン的か」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』(北海道大学)、第21号、2015年、pp.21-33.
- 寺田龍男 「『ディートリヒの敗走』からハインリヒ・フォン・ミュンヘンの『世界年代記』へ—主人公の「祖先の系譜」について—」、『独語独文学研究年報』(北海道大学)、第42号、2015年、pp.1-23.
- 寺田龍男 「ディートリヒ叙事詩の語り出し—『ディートリヒの敗走』の構造考察のために—」、『メディア・コミュニケーション研究』(北海道大学)、第69号、2016年、pp.99-116.
- 中林練 「宮廷的美徳の駆動力としての「高貴な心」」、『研究年報』(慶応義塾大学独文学研究室)、第33号、2016年、pp.39-57.
- Maiko NISHIWAKI (西脇麻衣子) “Zur Mehrfachnegation im Mittelhochdeutschen - aus mereologischer Perspektive-”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“ 『ドイツ文学』 151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.124-142.
- 浜野明大 「準主人公に映し出されるキリスト教的ミンネ理想像—『ヴィレハルム』のギュブルク(アラベル)と『散文ランスロット』のガラートを例に」、『日本独文学会研究叢書』、第109号 (『中世ドイツ文学における「愛」の諸相—「ミンネ」が文学化された意味を求めて—)、2015年、pp.60-69.
- Jun MATSUURA (松浦純) “Körper vs. Sprache. Zu poetologisch-anthropologischen Konzepten der Tristandichtungen Eilharts von Oberg und Gottfrieds von Straßburg”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“ 『ドイツ文学』 151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.25-53.
- 山本潤 「中世ドイツ文学に見るローマ観—『皇帝年代記』および『ディートリヒの逃亡』を題材に—」、『西洋中世研究』(西洋中世学会)、第7号、(特集「中世のなかのローマ」)、2015年、pp.97-117.
- 山本潤 「『ディートリヒの逃亡』における「作者」像—ジャンル交差の諸相から—」、『詩・言語』(東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会)、第81号、2015年、pp.61-90.
- 山本潤 「名前と作者—中世俗語文芸における作者性—」、『日本独文学会研究叢書』、第110号 (『名前の詩学—文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題—)、2015年、pp.18-33.
- Jun YAMAMOTO (山本潤) “Konzeptionen der Geschichtlichkeit in der genealogischen Vorgeschichte von Dietrichs Flucht”, *Neue Beiträge zur Germanistik* (Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“ 『ドイツ文学』 151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.75-91.
- 渡邊徳明 「愛 (minne) における誠実 (triuwe) の問題について—『エネアス物語』と『トリスタン』を中心に—」、『日本独文学会研究叢書』、第109号 (『中世ドイツ文学における「愛」の諸相—「ミンネ」が文学化された意味を求めて—)、2015年、pp.45-59.
- 渡邊徳明 「中世文学における「妖なる人」の身体について—近代文学における主体の危機との相違と類似—」、『リュンコイス』(桜門ドイツ文学会)、第49号、2016年、pp.1-17.
- <研究動向紹介>
- Akihiko FUJII (藤井明彦) “Einleitung mit einer Bibliographie zum Sonderthema”, *Neue Beiträge*

zur Germanistik (Internationale Ausgabe von „Doitsu Bungaku“ 『ドイツ文学』 151), Bd.14 / Heft 1, 2015, pp.7-24.

北欧文学 (書誌担当: 渡邊徳明)

<研究 (雑誌・紀要論文等) >

林邦彦 「フェロー語バラッド『ヘリントの息子ウイヴィント』の三ヴァージョンとノルウェー語バラッド『エルニングの息子イーヴェン』」、『アーサー王物語研究: 源流から現代まで』 (中央大学人文科学研究所編)、中央大学出版部、2016年、pp.231-260.

林邦彦 「フェロー語バラッドIvint Herintssonの3ヴァージョンとノルウェー語バラッドKvikkjesprakk」、『中央大学人文研紀要』 (中央大学人文科学研究所)、第81号、2015年、pp.115-139.

<翻訳>

『北欧のアーサー王物語: イーヴェンのサガ/エルクスのサガ』 (林邦彦訳) 麻生出版、2013年.

仏文学 (書誌担当: 高名康文)

<研究 (単行本) >

『アーサー王物語研究—源流から現代まで—』 (中央大学人文科学研究所編)、中央大学出版部、2016年、397 p.

『<驚異>の文化史—中東とヨーロッパを中心に—』 (山中由里子編)、名古屋大学出版会、2015年、528 p.

<研究 (雑誌・紀要論文等) >

フィリップ・ヴァルテール「アーサー王物語の源流」 (渡邊浩司訳)、『アーサー王物語研究—源流から現代まで—』 (中央大学人文科学研究所編)、中央大学出版部、2016年、pp.3-31.

植田裕志「物語をどのように終わらせるのか—『ペルレスヴォー』の場合—」、『名古屋大学文学部研究論集 (文学)』、第62号、2016

年、pp.157-190.

小川直之「ロンドン大英図書館王立文庫所蔵15 E VI 写本、別名「タルボット・シュルーズベリー写本」について—挿絵と編集の意図を中心に—」、『亜細亜大学学術文化紀要』、第28・29号、2016年、pp.9-40.

小沼義雄「タンタジェルの馬上槍試合におけるゴーヴァン像—クレチアン・ド・トロワ『聖杯の物語』におけるセルフパロディ—」、『埼玉県立大学紀要』、第17巻別冊、2015年、pp.1-15.

佐佐木茂美「「死」、「傷」、「医・魔術」—十三、十四世紀の散文物語 (再読の試論)—」、『神話・象徴・儀礼II』 (篠田知和基編)、楽瑯書店、2015年12月、pp.31-46.

瀬戸直彦「卷子本からコーデクスへ—写本欄外挿画が語るもの—」、『早稲田大学フランス語フランス文学論集』 (早稲田大学文学部フランス文学研究室)、第23号、2016年、pp.80-94.

Megumi Tanabe (田辺めぐみ)、« La fonction signifiante de l'ornement marginal des livres d'heures bretons du XV^e siècle », in M. COUMERT et H. BOUGET (dir.), *En Marge*, Brest: Centre de recherche bretonne et celtique, Université de Bretagne Occidentale (coll. « Histoires des Breagnes »: 5), 2015, pp.313-328.

Megumi Tanabe (田辺めぐみ)、« Les sources d'ornement végétal dans les *Heures de Marguerite d'Orléans* (Paris, BNF MS. LAT. 1156B) », in I. Trivisani-Moreau, A.-N. Taïbi et C. Oghina-Pavie (dir.), *Traces du végétal*, Presses Universitaires de Rennes, 2015, pp. 243-252.

本田貴久「アーサー王伝説とミシェル・レリスの「聖杯探求」が出会うとき—Beadeverの名をめぐる—」、『アーサー王物語研究—源流から現代まで—』 (中央大学人文科学研究所編)、中央大学出版部、2016年、pp.325-356.

Takeshi Matsumura (松村剛)、« Regard sur la lexicographie du français médiéval (premier article). Comment lire les dictionnaires du français

- médiéval ? », *FRACAS*, Groupe de recherche sur la langue et la littérature françaises du centre et d'ailleurs (Tokyo), 29, avril 2016, pp.15-35.
- Takeshi Matsumura (松村剛), « Regard sur la lexicographie du français médiéval (deuxième article). Sur le caractère régional du vocabulaire », *FRACAS*, 30, avril 2016, pp.12-30.
- Takeshi Matsumura (松村剛), « Regard sur la lexicographie du français médiéval (troisième article). En cherchant des attestations charnières », *FRACAS*, 31, avril 2016, pp.16-34.
- Takeshi Matsumura (松村剛), « Regard sur la lexicographie du français médiéval (quatrième et dernier article). Pour sortir des sentiers battus », *FRACAS*, 32, avril 2016, pp.18-36.
- 渡邊浩司「ケルトの女神」、『世界女神大事典』（松村一男、森雅子、沖田瑞穂編）、原書房、2015年9月、pp.334-389.
- 渡邊浩司「2人の聖ヨハネをめぐる神話的考察」、『中央大学経済研究所年報』、第47号、2015年11月、pp.495-508.
- 渡邊浩司「ゴーヴァンによる医療行為とインド＝ヨーロッパ語族の医学理論」、『神話・象徴・儀礼II』（篠田知和基編）、樂瑯書院、2015年12月、pp.35-54.
- 渡邊浩司「病を癒すゴーヴァンの血（『ランスロ本伝』「ガリア辺境」687～697節）」、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）、第48号、2016年2月、pp.1-21.
- 渡邊浩司「ゴーヴァンの異界への旅—クレティアン・ド・トロワ作『聖杯の探求』後半再読—」、『アーサー王物語研究—源流から現代まで—』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.145-194.
- 渡邊浩司「クレティアン・ド・トロワ作『聖杯の物語』前半における〈血の滴る槍〉の謎」、『フランス—経済・社会・文化の実相』（宮本悟編）、中央大学出版部、2016年9月、pp.237-269.
- Kôji WATANABE (渡邊浩司), "Les rites funéraires dans les romans arthuriens en vers des XII^e et XIII^e siècles", in A. CAIOZZO (dir.), *Mythes, rites et émotions. Les Funérailles le long de la Route de la soie*, Paris : Honoré Champion, 2016, pp.51-71.
- 横山安由美「マリ・ド・フランスの『レー』にみる英仏の二重性—コンタクト・ゾーンとしてのイングランド—」、『国際交流研究』（フェリス学院大学国際交流学部紀要）、第18号、2016年3月、pp.25-57.
- <辞書・事典>
- 篠田知和基・丸山顕徳編『世界神話伝説大事典』、勉誠出版、2016年8月、1000 p.
- <原典の校訂版、および原典の翻訳>
- L'histoire ancienne jusqu'à César (deuxième rédaction), édition d'après le manuscrit OUL 1 de la Bibliothèque de l'Université Otemae (ancien Phillipps 23240), étude de langue, glossaire et index nominum Yorio Otaka, Introduction et bibliographie Catherine Croizy-Naquet, Medievalia 88, Orléan : Paradigme, 2 vols, 2016, t.1 : 360 p. et t.2 : 307 p.*
- 『フランス民話集V』（金光仁三郎、渡邊浩司、本田貴久、武田はるか、林健太郎、志々見剛訳）、中央大学出版部（中央大学人文科学研究所翻訳叢書15）、2016年3月、904 p.
- <研究書の翻訳>
- 「眠れる森のペルスヴァルーイゼール県の廃墟に描かれた極めて貴重な壁画—『アルファベ』第十五号より」（渡邊浩司・渡邊裕美子訳）、『中央評論』、第295号、2016年5月、pp.124-129.
- <書評>
- 辻部（藤川）亮子「Denis Bjaï & François Rouget (eds.). *Les Poètes français de la Renaissance et leurs « librairies ». Actes du Colloque international de l'Université d'Orléans (5-7 juin 2013)* [Cahiers d'Humanisme et Renaissance, 122], Genève, Droz, 2015, 550p. €49.55.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12

月、p.166.

辻部（藤川）亮子「Alain CORBELLARI. *Le Philologue et son double. Études de réception médiévale* [Recherches littéraires médiévales, 17], Paris, Classiques Garnier, 2014, 486p., €39,00.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12月、pp.172-173.

辻部（藤川）亮子「Ji-hyun Philippa KIM. *Pour une littérature médiévale moderne. Gaston Paris, l'amour courtois et les enjeux de la modernité* [Essais sur le Moyen Âge, 55], Paris, Honoré Champion, 2012, 218p., €55,00.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12月、p.183.

吉川文「Yolanda PLUMLEY, *The Art of Grafted Song: Citation and Allusion in the Age of Machaut*, Oxford – New York, Oxford University Press, 2013, xxiv + 460p., £48.00.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12月、p.192.

渡邊浩司「『アーサーとマーリン——四世紀・中英語の物語——』（オーヒンレック写本に基づくアンヌ・ベルトウロによる現代フランス語訳・グルノーブル大学出版局・二〇一三年）」、『中央評論』、第288号、2014年7月、pp.214-217.

<研究動向紹介>

クリスティーヌ・デュクルシユー＝ヴェルボヴァン、田辺めぐみ「メネストレル—中世学的人的ネットワークとポータルサイト—」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12月、pp.211-213.

中世ラテン文学・伊文学・西文学（書誌担当：高名康文）

<研究（単行本）>

石坂尚武『地獄と煉獄のはざままで—中世イタリアの例話から心性を読む—』、知泉書館、2016年3月、507 p.

望月紀子『イタリア女性文学史—中世から近代へ

—』、五柳書院（五柳叢書）、2015年12月、301 p.

<研究（雑誌・紀要論文等）>

大黒俊二「女性が書くとき—限界リテラシーからみるイタリア・ルネサンス—」、『世界史の研究』（山川出版社）、第684号、2015年5月、pp.1-15.

尾形希和子「西洋中世における象の寓意と象徴」、『沖縄県立芸術大学紀要』、第23号、2015年、pp.1-20.

南映子「ペルスヴァル、パルジファルとパーシヴァル少年—クリスティーナ・ペリ・ロッシ『狂い船』、「聖杯の騎士」の章を読む—」、『アーサー王物語研究—源流から現代まで—』（中央大学人文科学研究所編）、中央大学出版部、2016年、pp.357-389.

<原典の校訂版、および原典の翻訳>

『アーサーの甥ガウェインの成長記—中世ラテン騎士物語—』（瀬谷幸男訳）、論創社、2016年6月、99 p.

『シチリア派恋愛抒情詩選—中世イタリア詞華集—』（瀬谷幸男・狩野晃一編訳）、論創社、2015年2月、263 p.

『完訳中世イタリア民間説話集』（瀬谷幸男・狩野晃一編訳）、論創社、2016年9月、214 p.

「『アマデイス・デ・ガウラ』⑧」（福井千春訳）、『中央評論』（中央大学中央評論編集部）、第293号、2015年11月、pp.238-247.

「『アマデイス・デ・ガウラ』⑨」（福井千春訳）、『中央評論』（中央大学中央評論編集部）、第293号、2016年1月、pp.125-137.

<書評>

瀧本佳容子「Juan CACAS RIGALL (éd), Anónimo, *Libro de Alexandre*, Madrid, Real Academia Española — Circulo de Lectores — Galaxia Gutenberg, 2014, 1138p., €24,5.」、『西洋中世研究』（西洋中世学会）、第7号、2015年12月、pp.170-171

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学 言語教育開発センター
新居明子 研究室内

Email: niiakiko@nufs.ac.jp

メンバーリスト : members@ml.arthuriana.jp

学会ウェブサイト : <http://www.arthuriana.jp/index.php>